慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	契沖に関する考察
Sub Title	A study of Keichu
Author	久松, 潜一(Hisamatsu, Senichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1963
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.14/15, (1963. 1) ,p.6- 18
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	西脇順三郎先生記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00140001-0006

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

契沖に関する考察

久松潜一

契沖に関してはかつて[註一]契沖伝をまとめたのであるが、その後の調査で増補されるべき点もある。ここではその中の一、二について考察したいのであるが経歴の方面で隠士、畸人という点から宗因との交渉についてのべ、業績の方面で契沖の歌集についての考察を記し、歌風についての私見をのべることとする。古典学者としての契沖についてのべてないのは、契沖伝補遺として書かれたからである。

一　隠士、畸人と契沖

日本文学の作家や研究家の流れの中に隠者・隠士・畸人と言われる系列がある。中世の隠者については隠者文学としてその性格が明らかにされているが、近世になると隠士、畸人とよばれている歌人文人の系列がある。中世では隠者とよばれる作家が主流をなしているのであるが、近世になると庶民の文学が主になり、戯作文学がその主流をなすので、隠者とその系列の文学はむしろ傍流にたつ感がある。しかし近世文学においてもただ傍流と見るべきではなく、主流をなす戯作文学の中にもそれが存しないのではない。西鶴にして

も艶隠者という性格を有している。然し近世でも隠者に対して隠士、畸人とよばれている場合が多い。隠士とよばれるのはかつては武士であった家柄のものが武家の封祿を離れ、現実の社会と離れて隠遁的な生き方をする所から名ずけられたのであろうか。もとより中世の隠者にしても西行や梵燈庵のように武士から隠者の境涯に入ったものがあるが、同時に隠者の態度には中世における無常観が根柢になっているようである。それに比べると近世の隠士は徳川幕府が開かれて豊臣氏に仕えていたものが祿を離れ隠士となったものが多い。その点では仏教的無常観よりも現実的な動機が主になっている。

近世のはじめに武士の祿を離れたものの生き方として一方に浪人がある。浪人は武家の祿を離れたが剣をすてず、剣を以て立っている。宮本武蔵や由井正雪などそれである。これに対して隠士は武を捨て文によって立っている。木下長嘯子がそれであり、戸田茂睡、西山宗因、契沖らはそれである。もっとも茂睡は徳川家の方の本田家に仕えていたが父の代から不運になり、茂睡も仕を辞して隠士となった。宗因や契沖は豊臣氏の方の加藤家に仕え、家が没落して武士の祿から離れたのである。いずれにしても隠士はこのようにして生じているのである。隠士はこのように武家の祿から離れた所からなったのであるが、その生き方は俗社会の塵にまみれず、現世においては隠遁的生活を送っている。そうして創作と言っても歌人、連歌師、俳人として立ち、もしくは学問の研究に入ってゆく。この場合隠士においては創作も学問も同じ態度でなされるのである。根柢には俗世間を超越した点がある。それがまた一方で畸人と言われる所以である、伴蒿蹊の近世畸人伝は所謂畸人を扱っているのであるが、それは歌人も連歌師も作家も画家も含まれている。ただ俗世間を超越した生き方という点では共通している。上田秋成も池大雅もそういう畸人の中に加えられている。畸人は奇人にも通ずるがその生き方は同一ではない。然し俗世間から超越した意味で俗人俗物でないという点で共通している。生き方の上では孤高であり、出世間であって俗気がない。

ここにとりあげる契沖もその意味で隠士であり、畸人である。彼の伝記についてはここに詳しくのべないが、契沖の祖父下川元宜は加藤清正に仕えて五千石をはみ、その伯父元真は一万石をはんでいる。然し元宜の子で元真の弟である元全の時には加藤家は没落し下川家一族は祿から離れるのである。元全が生活のため青山家に二百五十石で仕えて尼ケ崎にあった頃、契沖は生れている。元全の長子元氏は祿を求めて越後にいったりしているがかつては高祿の武士であった家が祿に離れた跡の家庭の暗さは想像しても明らかである。

そういう家に生れた契沖が少年にして出家したことも首肯される。真言僧として高野山で修行し、やがて曼陀羅院の住持になるが普通の僧侶として檀家をかかえたわずらわしい住持生活に堪えられず、寺を出奔して一時は室生山に入って死のうともするが、やがて山村にこもってしまう。はじめ和泉の久井村に五年ほど住み、後に近くの万町の伏屋家に四年ほどおり、約十年の山村の生活の後、母を養うために再び妙法寺の住持になって約十年を過ごすが、母がなくなると寺を弟子にゆづって円珠庵に隠棲するのである。その間を通して古典の学に励むのである。親しい友で同じく武士の境涯から離れて隠士生活を送る下河辺長流が水戸義公に請われて万葉集の注釈を行っているが病気のため業が進まないので契沖は代って万葉集の注釈を行う。その注釈書を万葉代匠記というのは長流に代ってした意である、契沖はその学徳を認められて義公に仕官をすすめられるが、辞退してただ万葉注釈だけは初稿本と精撰本と二通りまで書いている。このような境涯や態度のうちに隠士、畸人としての契沖の生き方がある。

二　契沖と宗因

ここで契沖と宗因との関係について考えておきたい。談林派の西山宗因も延寳二年八月三日に万町の伏屋家に一宿していることから契沖と宗因とはここで一夕逢う機会があったのでないかと思うからである。

西山宗因は言うまでもなく談林風の主唱者であるが、その経歴については顕原氏の「宗因の連歌」（俳諧史の研究）、「西山宗因」「西山宗因の連歌論考」（俳諧史論考）や弥富破魔雄氏の「加藤正方と西山宗因」、中村俊定氏の「西山宗因の初期の連歌」また近くは宗因の熊本からの自筆紀行「飛鳥川」が小宮豊隆氏によって紹介複製されており、その他の論考もあって次第にその経歴も明らかになって来ている。

宗因は名は豊一、通称は次郎作と言い、肥後に生れている。宗因の父は加藤清正に仕えていた関係で宗因も忠廣の臣で八代にいた加藤正方に仕えたが寛永九年二十八才頃、加藤家断絶の折、親を残してひとり都に上って里村法橋昌琢について連歌を学んだ。伏見に住み、後、正保四年の頃、大阪に下り、天満宮のそばに住んで連歌の点者となっていたと言われる。彼が俳諧を主とするに至ったのは四十代になってからのようである。

熊本時代の事については「飛鳥川」によって明らかになった点が多いが、その中に、

釈将寺豪信僧都は吾あげまきのころより難波津のことの葉をも教へ従ひて師弟のむつび年久しく侍れば云々

とあるから、熊本の豪信について和歌を学んだことが知られるし、また八代の正方も連歌を好んでそういう方面からも深い主従の縁があったことが知られる。正方は風庵と号して連歌をたしなんだのである。そうすると都に上る前から昌琢について連歌を学んでいたとも見られ、その関係から早く都に上ることになったかも知れない。この点芭蕉とその主蟬吟との関係にも似ている。

それよりも私の関心を引くのは、契沖も同じくその祖父の元宜や伯父の元真が加藤家に仕えていた点で宗因と同じ境涯にあったことである。そうして後年において宗因も契沖も近世における文芸復興の重要なる一翼となったことは興味深い点である。もとより契沖は、宗因とは三十五才ほど年令が相違しており、宗因は契沖の父と同じ年令であり、境涯もその点だけは父と似ていると言えるが文学学芸という点から言えば宗因と契沖とは同じ方向であると言える。

このように宗因と契沖とは清正に仕えた一族という点で因縁があるが、然し宗因と契沖とは相会する機会があったかどうかは明らかでない。ただ後年相会したかも知れないと思う点がある。それは後に宗因が和泉の方に旅行した際、和泉の万町の伏屋重賢の家に宗因も宿泊したことである。この点は顕原氏によっても延宝二年七十歳の秋に宗因は高野詣を行い、八月三日和泉の万町の伏屋家に宿って

いなばもる里や泉州万町楽

とよんだことが報告されているが、私もその事実に附加うべき一の資料をかつて得た。伏屋重左衛門重賢邸は契沖が三十五六才から四十歳頃に至る四年ほど止まって古典研究にふけった所であり契沖が大阪に帰った後も親しく交っているが、契沖が伏屋家に参ったについては一の理由がある。

私はかつて万町の伏屋家を訪れたことがあるが、その時、家人から得た四枚の摺物の中に、

師の祖父元宜加藤家に仕ふ。父元全青山家に仕ふ。重賢の祖父一安伏屋飛驒守豊太閤君に仕ふ。父竹麿泉州池田家を嗣伏屋氏と改む。其祖よりのしたしみの因により師も亦ここに来る。

とあることによって重賢と知った理由がわかった。この事は契沖伝の中に報告した所である。そうして同じ摺物の中に宗因の事も記

してある。即ち邸内図によると契沖がいた養寿庵の跡と庭樹を隔てて梅の屋跡と名ずけた所があり、「梅の屋に西山梅翁遊宿す」とあり

梅の花知らぬ身もしるにほひかな

その他の句が記してある。宗因が伏屋家に泊ったのは重賢も俳諧に親しんだために知った間柄であったためもあろうし、伏屋が布施家として旅宿をしたとも言える。同時に契沖と親しんだのが秀吉の清正一族に仕えた関係からであったとすれば宗因もまた同様な関係で知ったかも知れない。

宗因が伏屋家に泊った延宝二年八月三日は宗因の七十歳の時であり、談林十百韻や大阪独吟集の刊行された延宝三年の前年である。談林風が漸く俳壇の中心になろうとしている時であり、宗因の多年の志が達せられようとした時であった。一方契沖は三十五歳の時であった。僧侶となっても心満たず一度住職となった曼陀羅院ものがれて室生で一度は岩に頭をうって死なうとしたが、それも果さず、心を定めて和泉の山村に入ったのは三十才前後である。はじめ五年は久井村に居り、三十四五才の頃から万町の伏屋家に移って邸内の養寿庵に只管古典を研究していたことは前にものべたが、宗因の宿った延宝二年に伏屋家に移ったらしいから、八月には恐らく契沖は伏屋家にいたと思う。図によると養寿庵と梅の屋とは同じ邸内であり、場所も近い上に、同じ豊臣加藤家につながるものたちであることから、宗因の宿った夜は契沖も宗因と会し、秋の一夜を重賢と三人で語り合ったと想像することも出来る。七十才の宗因を中心として契沖と重賢とが語り合ったとすればそれは和歌や連歌、俳諧の事であったかも知れず、また或は没落した豊臣氏や加藤家に対する追憶であったかも知れぬ。とにかく和泉の山村の静かな秋の一夜のこの好会を想像して私は無限の感慨を禁じ得ないのである。

宗因はそれから大阪に帰り、また江戸にも出て談林風は俳壇の中心となった。契沖はなお黙々として山村の一室に古典を研究したが、数年の後には大阪に出て和泉時代の蘊蓄を披瀝して万葉代匠記の著述に没頭するに至るのである。然し契沖は後に円珠庵に隠棲するがこれは伏屋家にある時契沖のいた養寿庵を重賢の好意でうつしたものである。契沖にはそれからも常に山村の生活が忘れ難かったであろう。宗因と契沖との進んだ道は異なったにしても同じく旧習を破る近世の新しい叫びであったのである。私は今まで宗因に対してはそれほど心を引かれる事もなく談林の俳諧にも興味を感ずること少かったが、しかし談林十百韻を読み直して見ると蕉風の基礎は

すでに見られるように思う。

なふ〜〜旅人三伏の夏　　在色

なみ松の声高ふして馬やらふ　　馬柴

の如きにも清新なるものが見られる。

そうして宗因の伝を調べる時、ここにも近世の黎明を感ずる。宗因が晩年俳諧よりも連歌を再びよんだと伝えられるがこれは談林風があまりに放埒になったことに対する反省であるかも知れない。宗因にも町人出でない武士出身の気節があるように見られる。没落した加藤家に仕えた武士であったということを考えればそこに契沖と通ずるものがあったと見ることが出来る。かつて書いた契沖伝に宗因と契沖との関係に一言もふれなかったのは大きな見落しであった。

三　契沖の延宝集と漫吟集との関係

契沖の歌は全集では延宝集と漫吟集類題との外に竜公美の刊刻した漫吟集十巻が収められている。その外にも四季出題和歌、「行かひ歌」、和歌唱和集、詠百首和歌、詠富士山百首和歌がのっている。これらの書誌については契沖伝にも扱ったのであるが、前三集の関係にはなお種々の問題があるし、それによって私家集の成立過程ということの共通問題を考えることにもなるので、ここに記しておきたい。

公美刊本の漫吟集は二冊十巻で四季の歌だけある。上冊には春歌三巻、夏歌二巻あり、下冊には秋歌三巻、冬歌二巻ある。これは竜公美が校訂して天明七年の冬刊刻したもので、はじめに本居宣長の序、竜公美の叙、竜善昌の序、下河辺長流の序、竜世華の題辞があり、つぎに安藤為章の契沖行實と契沖の肖像をかゝげ、終には天明七年の渡辺直麿や富小路良直の跋がある。公美の叙によると公美の父善昌が契沖の門人であったので、同じ門人の宇治の恵心院主良舜僧都とともに円珠庵に契沖を訪うて漫吟集を借り良舜と協力してこれを書写し、その家に秘蔵したが、善昌の歿後、公美の門人若山隆賢がしきりに請うので、上梓せしめたとある。然し刊刻がなってまだ校正が終らないうちに天明八年の京都の大火で版木が悉く焼けてしまったが、その校正刷が世に残りそれが富岡鉄斎の蔵に帰したの

が佐佐木信綱博士に贈られた。そうして契沖全集第七巻に印刷されるに至ったのである。

これに対して漫吟集類題二十巻は四冊本で下河辺長流の序があり終りに石津亮澄の文化十年三月の跋がある。また奥に

天明七丁未歳十二月原刻

文化十二乙亥歳二月校正再刻

とあり、書林に皇都吉田新兵衛、東都の西宮弥兵衛、英平吉とある。ここに天明七年原刻とあるのは十巻本の竜公美のそれをさすことは石津亮澄の跋のうちに

此集をすりかたきにものせしは、これよりさき天明七年といふとしの冬の事になむ。さらに其世に竜公美といふ人ありて、其父のあたりにものまなびせしゆかりとて、つたへもたる本をもて春夏秋冬の部十巻をえらせものせしが、えりあやまりやあるとてよみただしなどするほどに、おなじ八年といふとしのみやこの火に彼かた木はのこりなくやけうせぬ

とあることによってわかる。いはばこの本は竜公美の校刻本がもとになっているから原刻と言ったのである。類題にある長流の序文は同文である。また巻十までは四季であって、この部分の組織は同じである。巻十一からは釈教歌、哀傷歌、羈旅歌、恋歌上、恋歌下、雑体物名、俳諧、長歌、雑歌一、雑歌二、雑歌三、雑歌四からなっている。

漫吟集の自筆稿本は大阪の殿村家にあり四冊本である。関戸家にも春だけであるが自筆稿本がある。殿村家蔵のが初稿本で関戸家のは再稿本である。漫吟集の初稿は長流の序があるから貞享の頃までには出来たと見られるが、前からも草本があったらしくそれから後も手許において絶えず書入を行っている。この稿本から出た写本もあるがそれ〴〵異なっているのは、自筆稿本そのものが次第に成長したのであり、関戸本はそのある段階に清書したのであろう。その成長過程にある稿本から写本もなっているが、その写した時によって相違するのである。上賀茂文庫にある漫吟集の写本は今井似閑の旧蔵本で信頼すべき写本であるが、自筆稿本の、ある段階の写本であるから自筆稿本とは相違がある。関戸家蔵の自筆稿本は殿村家の自筆稿本に書入れてある歌が、本文に書きつがれてあるから清書本と見るべきであるが、それも最後の段階かどうか疑わしい。

竜公美刊本もある年代における稿本の前半を版にしたものと見られる。従って類題本の刊本の前半と比べても歌の出入がある。巻

一、春上を見ても、巻頭第一首はいづれも

菅の根に雪はふりつつけぬがうへに冬をしのぎて春はきにけり

であるが、公美本の第二首

鶯もなかぬかぎりの年のうちにたがゆるしてか春はきぬらん

は類題本では第五首にある。公美本第三首

あふ坂や冬の日数の関はあれど年のこなたにこゆる春かな

は類題本ではそのつぎの第六首になっている。これによると類題本の第二、三、四首は公美本の後に書入れたものと見ることが出来る。

このようにして類題本は次第に成長していった形を示している。自筆稿本の巻一のはじめの所を見ても原形は公美本の歌の順序で書かれてあり、それに縦横に歌が書入れてある。殿村家本も関戸家本漫吟集自筆稿本も契沖全集にそれぞれに数葉写真がかゝげてあるのでそれで見てもわかるが、殿村家本には行間や紙のあいている所に所せましと歌が書入れてある。それらは大体刊本の漫吟集類題に増加して入っている歌である。それによっても竜公美本は漫吟集の成長過程を見る上に貴重な資料であることを今更ながら感ずるのである。

それとともに更に注意すべきは契沖和歌延宝集と漫吟集との関係である。契沖和歌延宝集は延宝九年四月十八日沙門契沖四十二歳自集とあって契沖が湖海狂士の請によって編したものであって長嘯子と長流のと合せて三家集になっている写本も存するが、早く日本歌学全書に収められ、契沖全集にも入っている。四十二才と言えば契沖が妙法寺の住持になってからである。歌数は少いが春歌、夏歌、秋歌、冬歌、恋歌、羇旅歌、哀傷、釈教歌、雑歌、雑体歌に分類されている。漫吟集類題の分類に比べると、類題では春、夏、秋、冬、以後は釈教歌、哀傷歌、羇旅歌、恋歌、雑体、雑歌になっていてすべて共通しているが、ただその順序は異なっている。漫吟集類題も契沖の自筆稿本があるのであって、どちらも契沖の自撰と見るべく延宝集は漫吟集のまだ初期の草本から契沖がえらんだものと見られる。延宝集の出来た頃は漫吟集の草本もなかったとも見られるが、泉州時代歌を多くよんでいるので若い年代からの歌を書き集めてあ

ったであろう。ただそれはどのように整理し、もしくは分類してあったかは疑問であって、ただ書き集めてあったのを延宝集ではじめて整理し分類を試みたのかも知れない。延宝集の巻頭の春の歌

うぐひすもなかぬかぎりの年の内にたがゆるしてか春は来ぬらん

は竜公美本では巻一、春上の第二首になっており、その前に、

菅の根に雪はふりつつけぬがうへに冬をしのぎて春はきにけり

がある。類題本巻一、春上もこの歌が第一首になっている。延宝集の巻頭の歌「うぐひすもなかぬかぎり」の歌は類題本では巻一、春上の第五首になっている。延宝集の第二首

みよしのの山は春たつけふことに霞なれてや又かすむらん

は「于時十七」とあるが、この歌は竜公美本では巻一、春上の第二十二首になっている。類題本では巻一、春上の第七十一首にある。こういう点にも延宝集と竜公美本と類題本とのそれ〴〵の相違が見られる。

ただ注意されることは、今まで延宝集と漫吟集とは別々にえらばれたものでその間にあまり関係がないように思われたが、分類の項目が全く同じであることや、延宝集の歌を増補していったのが竜公美本であるように見られる所から、延宝集が漫吟集の第一草稿であるように認められることである。契沖は早くから歌をよんでおり、殊に泉州時代は多くの歌をよんでいるが、それらを集めてはあったが歌集の体をなしてはいなかったのを延宝九年に湖海狂士にたのまれて整理し、分類して自撰歌集をえらび、それからはこれをもとにして次第に書入増補していったのが漫吟集ではなかろうか。そうしてその成長のある段階に竜公美本が出来、また更に成長して殿村家本になり、それを更に清書したのが関戸家本である。その後も書入が行われたかも知れない、漫吟集には「元祿十三年三月十五日憲意闍梨身まかりけるに」という題詞の歌もあり十三年秋即ち歿する前年の万葉集竟宴の歌まであるから歿する近くまで書入れていったのであろう。そうしてその漫吟集の最初の第一稿が延宝集であると見られる。そうすると自撰私家集の形成史、もしくは成長史をこれによって知ることが出来るのである。

四　契沖の歌の技法と写実性

契沖の歌は和歌史の上で必ずしも高い位置をしめることは出来ないにしても契沖の生涯にわたっての心境や思想を見得るものが多い。題詠が多くあるがその中に彼の心境が託されていると言える。四季の歌にも生活や心境の見られる歌は多いがまして、哀傷歌や雑歌になると彼の生活記録とも見るべきものである。四十二才の延宝集が五百二十首ほどであったのに対して漫吟集は六千余首になっておるが、そのような歌集の成長のうちに契沖の人間形成も見られるのである。延宝集の歌は四十二才までの作であるが、漫吟集の中には延宝集に見えない曼陀羅院の住持時代の歌や和泉の山村時代の歌も入っているから、契沖の歌を年代順に整理することも出来る。ただ歌風的に見ると早く定まってしまって万葉集を研究してもそれが歌風の上に反映してくることが少いようであるが、果して万葉歌風の影響はないかどうか。ここでは契沖歌風の性格について考察を加えておきたい。

漫吟集二十巻の分類を見ると春三巻、夏二巻、秋三巻、冬二巻で四季で十巻を占めている。巻十一以下は釈教歌一巻、哀傷歌一巻、羇旅歌一巻、恋歌二巻、雑体一巻、雑体四巻からなっている。古今集の部立に近く、雑体として物名、俳諧、長歌を一巻によんでいるのも古今集の伝統の上にたっている。この部立は自撰の延宝集に見られ、それが増補され成長したのが漫吟集であることは前にのべたが、それは漫吟集も契沖の自撰であることを語っている。

そうして契沖の歌風は万葉歌風よりは、古今集の歌風を経て新古今歌風に至る段階にあるようであり、いずれかと言えば新古今風に近いと言ってよい。春の若菜をよんだ

かすが野に雪はふれども春の日のひかりにあたるわかなをぞつむ
むらさきはまだもえ出ぬ春日野にけふはわかなのゆかりをぞつむ

などの歌を見ると古今風であるが、

にごりえにやどる影よりかすめばやぬるる顔なる春の夜の月
雁がねの帰るつばさを又やもるあかつき寒ききさらぎの霜

などになると新古今風と言える。そうして、新古今風の巧緻な歌に契沖の歌の特質があるようである。然しそういう場合にも契沖の歌には新古今風の余情のある幻想的世界よりは写実的に自然をみつめようとする所がある。たとえば

大はらやけむり絶にしすみがまに灰のみ白くのこる泡雪

の「灰のみ白くのこる」などは写実味がある。

ぬるみ行苗しろ水の中よどによどむまもなくかはづ鳴なり

の上句にも苗しろ水がぬるんでゆく点をよんでいるのは、和泉の山村でながめた春の農村風景が写実的によまれているのである。

雁よかり花やはつらき月やうき聞ふるさぬを何かへるらん

には清新な詞づかいが見えるが、これらには曽禰好忠の影響とも見えるものがある。漫吟集巻六にも「好忠が歌にうするゝとよめり、王維が詩に紅蓮落故衣」などの題詞も見え好忠の歌はよくよんでいる。

山陰はくれぬにくれてつつじはら照れる岡べは入り日をぞつく

この歌にも山村の夕ぐれがよく写実的にうたわれていると言ってよい。むしろ玉葉風に近いと言える。

夏の歌であるが

あぢ村の遠よりあとのみなと田に人こそさわげ早苗とる日は

はみなと田とあるから、山村の歌ではなく、難波の頃の歌かと思われるが下の句などに農村風景が写実風にうたわれている

くもるだにうれしとおもひし夏の日のゆふたつ空に影ものこらず

なかぞらにゆふたつ雲はただよひて日かげぞはやく峰にかへれる

の歌など写実のこまかさが見られる。

万葉の詞句をよんだ歌は「とこしへに春秋ゆけや東路のおくにきこゆる西の山へは」「橘の陰ふむ道にしのべともむかしぞいとど遠ざかりゆく」など存するが、表現に新古今風が多いと言える。しかしまた契沖の歌に写実的な点が多いのは万葉集の歌の影響と見られる。秋の歌では

空の色は水よりすみて天の川ほたるながるるよひぞ涼しき
おほ空に秋風はやみ吹日すら猶しかすがに霧たなびけり

などに清新な写実を認めることが出来る。冬の歌で朝落葉という題の

庭の霜軒の朝日にもみぢばのよのまに散しほどはみえけり

には自然のこまかい観照が見え夕落葉という題の

はし近く独ながむる夕暮に庭もそとももちるこのはかな
秋よりもこのはのおつる夕風に物のあはれぞいとど身にしむ

には抒情の真実が見られる。残菊という題の

霜がれのまがきの苗の翁さび色になるとも誰かとがめん

には、基俊の「翁さびゆく白菊の花」の影響があるかと見られる。また冬の歌に諏訪湖氷十首という題で十首の連作があるが、契沖が諏訪にいった記録は見えないから題詠ではあろうが、こういう題材で十首もまとめてよんでいることが注目される。

以上漫吟集の前半四季の歌について若干の歌をあげつつその歌風にふれたが歌風的には古今風から新古今風の間をいっているが、そういう伝統的歌風のなかにたとえば好忠を愛好しているような点が見え、それが八代集、特に新古今の歌風には見えない写実を重んずることにもなっている。新古今的な技法をもった歌にも幽玄というべき情趣が感じられないのは万葉風の写実味があるからであろう。

契沖は精撰本万葉代匠記に万葉、古今、後の集の歌風を比較して、万葉集は「高く大きなり、なりは奇怪ならず、心を入れず」とし古今集は「高く大きなる点劣る。なりはやや面白し、心あるさまにつくる」とし後の集は「なりをいかで作出てしがなと巧む、心を附て景趣大からむとする」と批評しており、河社にも古今集と新古今集とをよむ歌とつくれる歌との相違であると評している。このようにして批評基準としては万葉集を重んじている。彼の作品との間に矛盾があるようであるが以上のように見てくると必ずしも矛盾ではないとも言えるのである。述懐や雑の歌を見るとそのことが一層認められるのである。

花紅葉その錦にもたちよらじいな〳〵我は世すて人なり

いかでわれ昔の人に似てしがな今の仏はたふとくもなし

これらを見てもそのことが言えるのである。

注一　契沖全集第九巻、契沖伝（昭和二年七月刊）